

丸元淑生『秋月へ』

坂口博

丸元淑生は、一九四五年八月中旬のヒロシマ訪問を次のように描写する。

戦争が終つて何日目かの朝、広島は祖母の安否が気遣われたために、一番の汽車で、私は単身広島に出かけた。その日になつて意外にたやすく切符が買えたためだったが、買えた理由は下関に着いてわかつた。切符は無制限に売られていたのだ。そのために、汽車に乗りきれない客が、列車からこぼれてホームに溢れていた。大きな荷物をもつた兵隊たちが、列車の窓という窓から無理矢理の侵入を試みていた。デッキには赤ん坊を背負つた母親がぶら下り、火のついたように泣き喚いている赤ん坊を、兵隊たちの荷物が押しつぶし、こづき、引っぱっていた。……

父の郷里は広島市内の江波という小さな漁港だった。家は牡蠣と海苔の漁場をもつ代々の網元だったが、父が会社員となつたために、現在では祖母が細々と半農半漁の生活をしながら、従姉と二人で住んでいた。だから、市内といつても賑やかな市街地ではなかつたので、安心はしていたのだが、岩国の被害を見ると、樂觀してはいられない気持ちになつた。

広島市内に入ったのは、岩国を出て一時間あまりしてからだつた。己斐を通過するあたりから眺望がひらけた。暗くてよくわからなかつたけれども、ずつとむこうのほうまで視界をさえぎるものは何もなくなっているようだった。

山陽線「己斐」駅は、今では「西広島」駅に改称されている。

この時、延岡大空襲で焼け出され、母の故郷の福岡県筑豊の後藤寺（田川市）に疎開していた「私」――嘉郎は国民学校六年生。江波は天満川と太田川に挟まれた中州の河口にあたる。地理的には己斐駅が近いのだが、「私」は横川駅を経て広島駅まで行く。「私」が記憶している江波への道筋が「広島」駅からのものだったから、当然の選択であつた。

汽車は横川でしばらく停車した。どこにも電灯はなかつたのだが、ぼんやりほの明りがあつた。すぐ近くに葉も枝も失くした立木が一本焼け残つていて、くすぶつていた。そのため木のまわりの空が、わずかに赤く見えた。「燐だ!」と、一つの声がいつた。

人骨のなかの燐が燃えるというのは、このことを指すのだろうか？ 何のせいだかわからなかつたほの明りは、たしかに青白い色をしていた。その青白きにも、場所によつて明暗の差があるように思われた。その後は誰も声を出す者はなく、列車の中はひそかな息づかいが聞こえるくらいに静かだった。目が馴れてくると、かなり遠くまで見えてきたけれども、とても江波のほうまでは見通せなかつた。暗黒の空の下には形をとどめている建造物は一つもなく、地を這う幽明が、ただぼんやりひろがっているばかりだった。

広島駅の構内に近づくと、骨だけになった建造物が、機関車のヘッドライトに照らされて、暗闇から姿を現わした。下関を出て十二時間あまりの間、私はデッキの近くの通路より先には進めなくて、ずっと立っただけだから降りるのには好都合だった。

この後、「直接線路に降りて、駅舎につながっているホーム」に上がり、「駅前の大橋」を渡る。しばらくは「誰も出会わなかった」。「闇のなかからリヤカーがあらわれて」、それを曳いている男から「どこに行きんさるん？」と「ぬるつとした声」で尋ねられる。

延岡空襲前後から極度の人間不信に陥っていた「私」は、「江波です」と答えるものの、「ゆっくりとその男から身をかわしてゆく。「危険のない人物」かも知れないが、「身を隠す場所」のない橋の上は「市内電車の線路を伝って、一気に走りぬけ」ていく。この橋はたぶん稲荷大橋だろう。

「電車の線路の走っている大きな道」から、「手頃な道」で南のほうに左折して海を目指す。「そのまま繁華街のほうに向って歩いていると、廃墟が厚みを増していて、待ち伏せている化物のように見えた」と、その理由を説明しているが、確かにその先は爆心地へ通じていた。

また、江波とを結ぶバスの発着する「鷹野橋に通じる大きな道」に行き当たったことも期待できた。溶けたガラスなど障害物の多い焼け跡の道を、裸足だったので用心しながら「三十分あまり歩いた頃、突然、眺望がひらけた」。右折して「広い道路の中央」を進み、「鷹野橋らしい五叉路になった交叉点」に辿りつく。

一九四四年まで「毎年夏休みになると、私は広島に帰ってひと夏を過ごしていた」にもかかわらず、市街地へバスから市内電車に乗り換えていた「鷹野橋」を、「停留所の標識も焼け落ちて」いて、確認できない。「紙屋町から宇品」に向かう路線には間違いないにしても、「鷹野橋」より「ずっと南のほう」なら「海まで橋はない」し、「北寄りの地点」でも、江波へは「二本の」元安川と太田川という一川を渡らなくてはならなかった。

一睡もできないままの長時間の車中だったにもかかわらず、「私」は橋が落ちている可能性を考え、きわめて冷静に行動する。「電車の線路の上を紙屋町の方角」に戻り、「次の停留所と思われる交叉点」で西側へ左折し、川岸へ出る。第一の橋は、「大きな障害物がわだかまっけていてその先で落ちているように見えた」ので、さらに南下して見覚えのあるバスで通っていた橋を渡る。これは南大橋か。「すぐにもう一本、太田川にかかっている舟入橋」があるはずだが、そこを渡れば「太田川ぞい下って迷うことなく江波に着ける」し、「舟入橋が落ちていたときには、そのまま太田川の東岸を下って行って、江波の真向いあたる地点から泳いで渡るつもりだった」という。

「舟入橋」は落ちていなかったため、川を泳ぎ渡ることなく、祖母の家も「昔のままの家並み」のなかに残っていた。ただ「雨戸や襖はみな吹き飛んでいて、縁側から家の奥庭まで素通し」だったが、祖母と従姉は無事だった。「奥の部屋に蚊帳」を吊って寝ている。

「ばあちゃん！」

「あなたは、嘉郎さんかいな、嘉郎さんよのお、夢のはずがあ

らすまあて、ようほんまにかあ、来ておくれたよのお、これが夢じゃあられすまあて、嘉郎さんじゃいや、嘉郎さんよのお、あんたらも、生きとつておくれたんよのお」

蚊帳の紐は千切れ落ち、「蚊帳ごしに伸ばされた祖母の両手が、私の両手をつかんだ」。

以上が江波へ辿りつくまでの、「私」の道程になる。地図を手にしているわけでもなく、廃墟のなかを記憶に頼ってひたすら歩いていく。「秋月へ」は、自伝的な要素を含んでいる作品だから、一九三四年二月五日生の作者・丸元淑生本人の体験を踏まえたものである。満十一歳の裸足の少年は、また六月二十九日のB 29百数十機による延岡大空襲も、列車乗車中にグラマン襲撃も遭遇している。岩国駅を通過する際には、「残った爆弾を捨てにきた」と伝承される八月一日の爆撃で、「月のあばた」のごとくなった構内も目撃している。そうした事柄が、ヒロシマでも「屍臭を濃く澱ませた、延岡とそっくり同じ焼け跡の匂いが、生きたもののまったく姿を見せない闇をおおっていた。……焼け跡の様子も延岡とまったく異なるところがなく」と感じさせている。ここでは、延岡も広島も岩国も、あらゆる戦災地を等価に観る視点が確保されている。

大分県生まれの作者は、ほかの作品にも出てくるように後藤寺から四六年四月に福岡市の福岡中学（旧制）に入学し、そのまま新制の福岡高校に進み、五二年三月卒の第四回生。さらに東京大学文学部仏文科を卒業している。大学在学中に出版書肆パトリア（パトリア書店）を創業し、富士正晴・島尾敏雄・真鍋呉夫・小林勝・開高健などの著書を刊行した。丸谷才一の翻訳書も出して

いる。売れない文芸書で経営に苦勞し、土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』（60・1）が話題になるも、会社は倒産・廃業する。その経緯は「遠い朝」（『文学界』80・12）に描かれる。敗戦直後の短い時期とはいえ筑豊で暮らしたことが、炭鉱閉山で失業者の溢れる現実を見過ごせずに、写真集の企画を生んだようだ。「秋月へ」（『海』78・10）をはじめ、芥川賞候補三回・直木賞候補一回を数えたが、「遠い朝」以降の小説は見ない。アメリカ栄養学に基づく健康・料理研究家に転身して活躍している。小説の刊行書は『鳥はうたつて残る』（文芸春秋、79・11）と『秋月へ』（中央公論社、80・2↓中公文庫版、86・4）の二冊。『秋月へ』には標題作のほかに、「贈物」（『海』78・12）「光にみちたあたたかい場所」（『海』79・9）の二篇も収録されている。

ところで、一九四六年三月創刊の「中国文化」を創刊号（原子爆弾特輯号）を中心に復刻するにあたって、呉大空襲の体験者である詩人の山田迪孝は復刻に賛同しない意見を次のように書いている。

中国文化創刊の際お誘いを受けて参加しましたが、私は原爆問題とは関係のないところで詩を書いているのだと一応はお断りしましたが、それはそれでよいからということだったので執筆しました。そんないきさつがありますので今回の企画には参加いたしません。私にとつては七月一日（原文では「六月三〇日」）の夜、空襲をうけた呉市民が阿鼻叫喚（原文は「呼換」と誤植）の巷を右往左往した姿が眼底に焼きついています。それに対して広島島の被災者がなんの共感を示さ

ないのは不都合だといつも思っております。(『中国文化』復
刻版Ⅱ81・5Ⅱ「賛同のことは」欄)

これに対しては、復刻刊行をになつた栗原貞子の「右の事情により、創刊号の詩、「明月亭」……は御名前とタイトルだけを残して割愛いたしました。書いたという事実だけは消えませんが」という短いコメントが付けられただけだった。

おそらく、栗原はじめ関係者の辛抱強い説得にも、山田は応じず、発表した作品の掲載も拒否することになったのだろう。その頑なな態度の背後には、さまざまな批判や事情があるとは思いますが、呉大空襲はじめとした都市空襲に対する「原爆」の特権化への直観的な苛立ちが見えてくる。「書いたという事実」でもって対処できる話ではなかったと思うのだが、こうした問題提起に対して、その後どのように論議が深まったのかは知らない。海軍鎮守府のおかれた軍港都市・呉では、空襲の被害記録も敗戦とともにほとんどが焼却廃棄されたという。

焼夷弾や爆弾によつて軍人も一般市民も「無差別」に殺戮する都市空襲と、広島・長崎へ投下された原子爆弾による空襲との違いは、どこにあるのだろうか。放射能による後遺症の問題、桁違いの殺傷能力などなど、挙げることは可能にしても、それは決定的な要因となりえるであろうか。後遺症というなら、精神的なそれは、どちらにも永続する。時効はない。死者にとつて、「死」の事実において、両者の相違を語ることは不可能であり、わたしたちにとつても無意味である。

丸元淑生は「鳥はうたつて残る」(初出は「文学界」79年6月号だが、以下の引用は初刊による。この箇所は初出にはなく、単行本に

際して書き加えられた)のなかで、日本人の主人公・ケンに、コールガールを職業とする金髪のアメリカ人・ミステイを相手として、「戦争中のことなんだよ、ぼくはまた十二歳だった、毎日、毎日、夜になるとサイレンが鳴つて眠れなかった、B29の大編隊がぼくたちの町の上を通つていくからだ」と語らせる。「一度ぼくは死んだから」、したがつて「恐怖」一般も感じなくなったという。ミステイには前夫とのあいだの十二歳の息子・ポプもいた。さらに「羽ばたき」(『文学界』80・6)でも、「兄と私は二度グラマンの襲来に遇つていた。熊蜂のようなずんぐりしたグラマンの黒い機影はまっすぐこちらに向つてきた。赤い尾をひいた弾が何度もま近を撃ち抜けていった。そのたびに私は死をまぬがれたのだ」と記す。

「鳥はうたつて残る」は、ラスベガスで賭博とセックスに明け暮れる男の物語だが、こんな「下手な英語」で交わした会話も見える。

「ぼくには悲しみがある」「わかるわ」「悲しみがぼくの勇気をつくっているのかもしれない、悲しみは骨になつてぼくの身体に棲みついてしまった、人間の骨という奴は悲しみで出来ているんじゃないかと思うよ、それが何かに立ち向わせるんだ、恐怖にも、もつと大きな障害にもね」「悲しみなら私にもあるわ」「そう思つていたよ、だから愛したのかもしれない」

それにしても、怒りや報復で行動することは容易であるが、「悲しみ」を骨にして生きていくのは、何と難しいことか。個人においても、民族・国家においても同じである。